

## 江戸時代の富士山南口登山道と御師

—須山区有文書・旧御師渡邊家文書からの実証—

### はじめに

わたしたちのふるさとにある富士山は、信仰や芸術に大きな影響を与えたとして、平成25年6月に世界遺産（文化遺産）として登録され、本年度で5周年を迎えました。

富士山資料館では、平成25年度に浅間神社と旧御師渡邊家の具体的な内容を紹介する登録記念特別展「須山浅間神社旧御師渡邊家の遺品」を、平成26年度は御師の成り立ちと入山料を中心とした1周年記念特別展「富士山信仰と文化」を開催しました。そして、平成27年度には、登山口集落である江戸時代の須山村をメインにした2周年記念特別展「江戸時代の村のようすと人々の生活—須山村をとおして—」を、平成28年度は宝永噴火後の登山道と登山者の動きに焦点をあてた3周年記念特別展示「富士山信仰と御師・登山道」を企画し展示を行いました。

本年度は登録5周年を記念し総まとめとして、江戸時代の須山村・須山浅間神社と富士山信仰・登山道と宝永の噴火・旧御師渡邊家の活躍と交流の4つの面を中心に須山区有文書・旧御師渡邊家文書よりテーマ「江戸時代の富士山南口登山道と御師」に迫りたいと思います。

### 江戸時代の須山村

須山村は「須山」・「巢山」・「珠山」・「素山」など様々な表記が用いられる中で、この地を支配した小田原藩から発給された元禄7年（1694）の租税書類に「深山村」と記されると、以降は深山村と呼ばれるようになりました。その後、明治7年（1874）に静岡県令に願い出て須山村に名称が統一されました。

須山村の特色について、嘉永元年（1848）の『蒲原宿助郷御免願い』に、「富士・愛鷹の両山にはさまれた悪地の畑ばかりの場所で、寒気が強く夏は霧が深く作物も実入りが少ない。そのため山稼ぎによって夫食（食料）を買っている。猪や鹿による被害が多く、垣根をめぐるして防いでいる。」と説明されており、農業には不向きだったことがわかります。村高は149石2斗9升1合で、土地にかかる年貢を主として金銭で納めていました。

天保3年（1832）の『辰年御物成可納割付之事』によると、米1石3斗と永（銭）22貫512文が課せられています。



『辰年御物成可納割付之事』年貢の請求